

【 復活讃詞 第2調 】

しせざるいのちよ、なんぢしにくだりし
死 生 命 爾 死 降

とき、かみのせいのひかりにてぢご
時 神 性 光 地 獄

くをころせり。しせしものをちかよ
殺 死 者 地下

りふくかつせしめしとき、てんぐんみな
復 活 時 天 軍 皆

よびていえり、いのちをたもうしゅ
呼 日 生 命 賜 主

ハリストスわがかみよ、こうえいはなんぢに
吾 神 光 榮 爾

き 帰 す。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつもよよに、アミン。
何 時 世 世

しととひとしくどうぎなるもの、ちゅう
使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實 神 智 役 者 聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい愛
 神撰 笛

にみちたるうつわ、わがくにのこう光
 満 器 我 國

しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照 者 亜使徒主教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および及
 爾 羊 群 爲

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい聖
 全世界 爲 生 命 賜

さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給

司祭) (黙誦： ^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしょう} 聖者の中に息い、^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう} セラフィムより讚榮せられ、^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} 悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい} 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行つる者を棄てずして、其救の爲に痛悔
^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ ととき おい なんぢ せい} を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの} る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい} を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
^{しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ} 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

A musical score for the Sanctus, consisting of ten staves of music in G major. The lyrics are written below the notes. The score includes repeat signs and a key signature change to D major for the final phrase.

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じ ゅ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第2調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんちのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
 主 我 力 我 歌 彼 我
 が す く い と な れ り 。

誦經) 主は厳しく我を罰したれども、我を死に付さざりき、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
 主 我 力 我 歌 彼 我
 が す く い と な れ り 。

誦經) ^{しゅ}主は、^わ我が^{ちから}力、^わ我が^{うた}歌なり、



【 使徒經 (アポストロス) 233 端 エフェス書6章10節~17節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと}聖使徒^{じん たつ}パウエルが^{しょ}エフェス人^{よみ}に達する書の讀、

司祭) ^{つつし}謹みて^き聽くべし、

誦經) ^{けいてい}兄弟よ、^{しゅおよ}主^{そのけん}及び^{ちから}其權の^よ力に^{けんご}頼りて^{かみ}堅固^{ぜんび}になれ。神の^{ぶぐ}全備の^き武具を^{なんぢら}衣よ、爾等^{あく}が惡
^ま魔の^{はかりごと}奸計^{ふせ}を^え禦ぐ^{ため}を得ん爲なり、^{けだしわれら}蓋^{たたかい}我等の^{けつにく}戰は^{おい}血肉に^{あら}於て^{すなわちしゅ}するに^{しゅ}非ず、乃首
^{りょう}領に^{おい}於てし、^{けんべい}權柄に^{おい}於てし、^こ此の^よ世の^{くらやみ}暗昧の^{せくん}世君に^{おい}於てし、^{てんくう}天空に^あ在る^{きょうあく}凶惡の^{しよ}諸
^{しん}神に^{おい}於てするなり。此に^{これ}因りて^よ神の^{かみ}全備の^{ぜんび}武具を^{ぶぐ}取れ、^あ惡しき^ひ日に^{おい}於て^{ふせぎ}禦^なを爲し、^{およそ}凡の
^{こと}事を^{じょうじゅ}成就して、^た立つ^えを得ん爲なり。故に^{ゆえ}立ちて、^{しんじつ}眞實を^{なんぢら}爾等の^{こし}腰に^{つか}束ね、^ぎ義の^{よろい}甲を
^き衣、^{わへい}和平を^{ふくいん}福音する^{よび}預備を^{もつ}以て^{あし}足に^{くつ}履はき、^{さら}更に^{しん}信の^{たて}盾を^と執れ、^{これ}之を^{もつ}以て^{あくてき}惡敵の^{ことごと}悉
^{ひや}くの^け火箭を^え滅す^{またすくい}を得ん、^{かぶと}又^{およ}救の^{しん}胃、^{つるぎ}及び^{すなわちかみ}神の^{ことば}劍、^と即^と神の^{ことば}言を取れ。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、主にあつて、その偉大な力によって、強くなりなさい。悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい。わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。それだから、惡しき日にあたって、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい。すなわち、立つて真理の帯を腰にしめ、正義の胸当を胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それをもって、惡しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。また、救のかぶとをかぶり、御靈の劍、すなわち、神の言を取りなさい。

司祭) ^{なんぢ}爾に^{へいあん}平安、

誦經) ^{なんぢ}爾の^{しん}神にも、^{しん}アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第2調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{ねが}願わくは^{しゅ}主は^{うれい}憂^ひの日に^{おい}於て^{なんぢ}爾に^き聴き、^{かみ}イアコフの^な神の名は^{なんぢ}爾^{ふせ}を^{まも}扨ぎ衛らん、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅ}主よ、^{おう}王を^{すく}救え、^{またわれら}又我等が^{なんぢ}爾に^よ呼ばん時、^{われら}我等に^き聴き^{たま}給え、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと}人を^{あい}愛する^{しゅ}主^{さい}宰よ、^わ我が^{こころ}心に^{かみ}神を知る^し智慧の^{ちえ}浄^{いさぎよ}き^{ひかり}光を^{かがや}輝かし、^わ我が^{しねん}思念

^めの^{ひら}目を^{なんぢ}啓きて、^{なんぢ}爾が^{ふくいん}福音の^{おしえ}教を^{さと}悟らしめ^{たま}給え、^わ我が^{うち}衷に^{なんぢ}爾の^{ふく}福たる^{いましめ}誠を

^{おそ}畏る^{おそれ}る^い畏をも^{われら}入れて、^{ことごと}我等が^{にくたい}悉くの^{よく}肉體の^ふ慾を^{およ}踏み、^{なんぢ}凡そ^{よろこ}爾の^{ところ}喜ぶ^{ところ}所

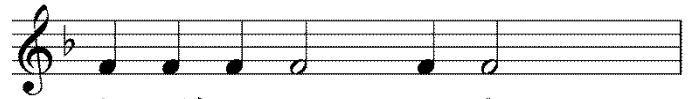
^{おも}を^か思い^{おこな}且つ^{ぞくしん}行^{せい}いて、^す屬^{いた}神の^{たま}生活を^{けだし}過ぐるを^{かみ}致させ^{かみ}給え、^{かみ}蓋^{かみ}ハリストス^{かみ}神よ、

^{なんぢ}爾は^わ我が^{たましい}靈と^{からだ}體との^{こうしょう}光^{われらなんぢ}照^{なんぢ}なり、^{むげん}我等^{ちち}爾と^{しせいしぜん}爾の^{しせいしぜん}無原の^{しせいしぜん}父と^{しせいしぜん}至聖^{しせいしぜん}至善にし

^{いのち}て^{ほどこ}生命を^{なんぢ}施^{しん}す^{こうえい}爾の^{けん}神とに^{いま}光^{いつ}榮^{よよ}を^{よよ}獻ず、^{よよ}今も^{よよ}何時も^{よよ}世^{よよ}に、^{よよ}アミン。)

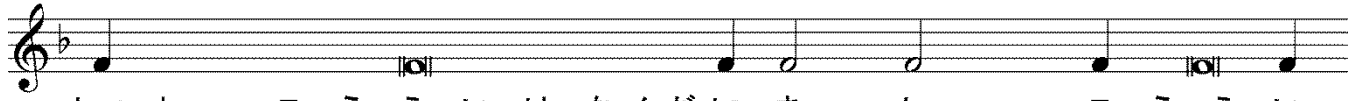
【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書71端 13章10~17節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅^たみて^{せいふくいんけい}立^きて^{しゅうじん}聖^{へいあん}福^{へいあん}音^{へいあん}經^{へいあん}を^{へいあん}聴^{へいあん}く^{へいあん}べし、^{へいあん}衆^{へいあん}人^{へいあん}に^{へいあん}平^{へいあん}安^{へいあん}、

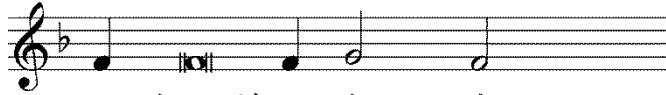


なんぢの し んにも 。
爾 神

司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、 こう えい は なんぢに き し、 こう えい
主 光 榮 爾 歸 光 榮



は なんぢに き す 。
爾 歸

司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 彼の時安息日にイイス ー の會堂に在りて 教を宣べたり。爰に十八年病の鬼を

患うる婦あり、偃みて、少しも伸ぶ能わざりき。イイス之を見て、呼びて之に謂えり、婦

よ、爾は其病より釋かれたり。乃手を彼に按せれば、彼直に伸びて、神を讚榮

せり。會堂の宰、イイスが安息日に醫を施ししを熅りて、民に謂えり、工作を爲す

べき日は六日あり、其中に來りて醫されよ、安息の日に於てせざれ。主彼に答えて曰えり、

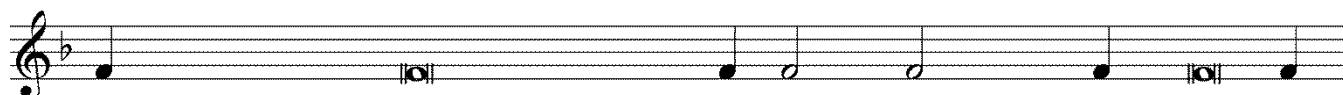
偽善者よ、爾等各安息日に於て其牛或は驢を槽より解き、之を牽きて

飲わざるか、況やアヴラアムの女なる此の婦十八年サタナに縛られたる者の結

を、安息の日に於て解くべからざりしか。彼が之を言う時、彼に敵する者は皆愧ぢ、衆

民は彼が凡の光明なる行事を喜べり。

(比較用 口語訳) イエスが安息日に、ある会堂で教えておられると、そこに十八年間も病気の靈につかれ、かがんだままで、からだを伸ばすことの全くできない女がいた。イエスはこの女を見て、呼びよせ、「女よ、あなたの病気はなおった」と言って、手をその上に置かれた。すると立ちどころに、そのからだがまっすぐになり、そして神をたたえはじめた。ところが会堂司は、イエスが安息日に病気をいやされたことを憤り、群衆にむかって言った、「働くべき日は六日ある。その間に、なおしてもらいにきなさい。安息日にはいけない」。主はこれに答えて言われた、「偽善者たちよ、あなたがたはだれでも、安息日であっても、自分の牛やろばを家畜小屋から解いて、水を飲ませに引き出してやるではないか。それなら、十八年間もサタンに縛られていた、アブラハムの娘であるこの女を、安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったか」。こう言われたので、イエスに反対していた人たちはみな恥じ入った。そして群衆はこぞって、イエスがなされたすべてのすばらしいみわざを見て喜んだ。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸